

# 海ぼたる

小川未明

青空文庫



ある日、兄弟は、村のはずれを流れている川にいつて、たくさんほたるを捕らえてきました。晩になって、かごに霧を吹いてやると、それはそれはよく光つたのであります。いずれも小さな、黒い体をして、二つの赤い点が頭についていました。

「兄さん、よく光るね。」と、弟が、かごをのぞきながらいいますと、

「ああ、これがいちばんよく光るよ。」と、兄はかごの中で動いている、よく光るほたるを指さしながらいいました。

「兄さん、牛ぼたるなんだろう？」

「牛ぼたるかしらん。」

二人は、そういつて、目をみはっていました。牛ぼたるというのは、一種の大きなほたるでありました。それは、空に輝く、大きな青光りのする星を連想させるのであります。

その翌日でありました。

「晩になったら、また、川へいつて、牛ぼたるを捕つてこようね。」と、兄弟はいいました。

そのとき、二人の目には、水の清らかな、草の葉先がぬれて光る、しんとした、涼しい風の吹く川面の景色がありありとうかんだのであります。

ちようど昼ごろでありました。弟が、外から、だれか友だちに、「海ほたる」だといって、一匹の大きなほたるをもらってきました。

「兄さん、海ほたるというのを知っている？」と、弟は兄にたずねました。

「知らない。」

兄は、かつて、そんな名のほたるを見たことがありません。また、聞いたこともありません。

さっそく、兄は、弟のそばにいつて、紙袋に包んだ海ほたるをのぞいてみました。それは、普通のほたるよりも大きさが二倍もあつて、頭には、二つの赤い点がついていましたが、色は、ややうすかつたのであります。

「大きなほたるだね。」と、兄はいいました。あまり大きいので、気味の悪いような感じもされたのであります。

二人は、晩には、どんなによく光るだろうと思つて、海ほたるをかごの中に入れてやりました。

「海うみぼたるをもらつたよ。」と、兄きょうだい弟だいは、外そとに出て、友ともだちに向むかつて話はなしましたけれど、海うみぼたるを知しっているものがありませんでした。

まれに、その名なだけを知しつていても、見みたといつたものはありませんでした。もちろん、その海うみぼたるについて、つぎのような話はなしのあることを知しるものは、ほとんどなかったのであります。

昔むかし、あるところに、美うつくしい、おとなしい娘むすめがありました。父ちちや、母ははは、どんなにその娘むすめをかわいがつたかしれませんが、やがて娘むすめは、年としごろになつてお嫁よめにゆかなければならなくなりました。

両りょうしん親しんは、どこか、いいところへやりたいものだと思おもつていました。それですから、方ほう々ぼうからもらい手てはありました、なかなか承しょう知ちをいたしませんでした。

どこか、金かね持もちで、なにご自由ふじゆうなく暮くらされて、娘むすめをかわいがつてくれるような人ひとのところへやりたいものだと考かんがえていました。

すると、あるとき、旅たびからわざわざ使つかいにやつてきたものだといつて、男おとこが、たずねてきました。そして、どうか、娘むすめさんを、私わたしどもの大だい尽じんの息むすこ子このお嫁よめにもらいたいといつたのです。

両親は、けつして、相手を疑いませんでした。先方が、金持ちで、なに不自由なく、そして、娘をかわいがってさえくれればよいと思つていましたので、先方がそんなにいいところであるなら、娘もしあわせだからというので、ついやる気になりました。

ただ、娘だけは、両親から、ひとり遠く離れてゆくのを悲しみました。

「遠いといつて、あちらの山一つ越した先です。いっだつてこられないことはありません。」と、旅からきた男は、あちらの山を指さしていました。

その山は、雲のように、淡く東の空にかかつて見られました。

「そんなに、泣かなくてもいい、三年たつたら私たちは、おまえのところにたずねてゆくから。」と、両親はいいました。

娘は、涙にぬれた目を上げて、東の方の山をながめていましたが、

「どうか、毎日、晩方になりましたら、私がああ山のあちらで、やはり、こちらを向いてお父さんや、お母さんのことを、恋しがつておもうと思つてください。」といいました。これを聞いて、父親も、母親も、目をぬらしたのであります。

「なんで、おまえのことを片時なりとも忘れるものではない。」と答えました。

娘は、とうとう旅の人につれられて、あちらの郷へお嫁にゆくことになったのでありま

す。

娘がいつてから、年をとつた父親や、母親は、毎日、東の山を見て娘のことを思つていました。けれど、娘からは、なんのたよりもなかつたのです。

娘は、まったく、旅の人にだまされたのでありました。なるほど、いつてみると、その家は、村の大尽であります。また、舅も、姑も、かわいがつてはくれましたけれど、賢という人は、すこし低能な生まれつきであることがわかりました。

彼女は、この愚かな賢が、たとえ自分を慕い、愛してくれましたにかかわらず、どうしても自分は愛することができなかつたのです。

娘は、西にそびえる高い山を仰ぎました。そして、明け暮れ、なつかしい故郷が慕われたのです。三年たてば、恋しい母や父が、やってくるといったけれど、彼女はどうしても、その日まで待つことはできませんでした。

「どうかして、生まれた家へ帰りたいもんだ。」と、彼女は思いました。

しかし、道は、遠く、ひとり歩いたのでは、方角すらも、よくわからないのであります。彼女はただわずかに、川に添うて歩いてきたことを思い出しました。どうかして、川ばたに出て、それについてゆこう。その後は、野にねたり、里に憩うたりして、路を聞

きながらいつたら、いつか故郷に帰れないこともあるまいと思ひました。

ある日、娘は、聳や、家の人たちに、気づかれぬように、ひそかに居間から抜け出たのであります。

川の流れているところまで、やつと落ちのびました。それから、その川について、だんだんと上つてゆきました。女の足で、道は、はかどりませんでした。草を分け、木の下をくぐったりして歩きました。いまにも、彼女は、追つ手のものがきはしないかと、心は急ぎました。どうかして、はやく、川をあちらへ渡つて越したいものだと思ひました。けれど、どこまでいつても、一つの橋もかかつていなかったのです。

川上には、どこかで大雨が降つたとみえて、水かさが増していました。やつと、日暮れ前に、一つの丸木橋を見いだしましたので、彼女は、喜んでその橋を渡りますと、木が朽ちていたとみえて、橋が真ん中からぼつきり二つに折れて、娘は水の中におぼれてしまいました。

「死んでも、魂だけは、故郷に帰りたい。」と、死のまぎわまで、彼女は思つていました。

やがて、娘の姿は、水の面に見られなくなりました。すると、その夜から、この川に、



ほたるが出て、水の流れに姿を映しながら飛んだのであります。

愚かな聾は、美しい嫁をもらって、どんなに喜んでいたかしれません。そして、自分ほ  
 できるだけ、やさしく彼女にしたつもりでいました。それが、ふいに姿を隠してしまつ  
 たので、また、いかばかり、悲しみ、歎いたでありましょう。ついに聾は、家の人たちが  
 心配をして、見張りをしていたにもかかわらず、いつのまにか、家から飛び出して、同  
 じ川に身を投げて死んでしまいました。

この水ぶくれのした死骸は、川の上に浮いて、ふわりふわりと流れて、みんなの知らぬ  
 まに、海に入ってしまったのであります。不思議なことに、この死骸も、またほたるにな  
 ったのです。

これが、海ほたるでありました。

二人の兄弟は、海ほたるについて、こんな物語があることを知りませんでした。  
 ただ、大きいから、かごの中に入れて、よく光るだろうと思つていました。

晩になると、海ほたるはよく光りました。川のほたるも負けずによく光りました。  
 「みんな、よく光るね。」と、兄と弟は、喜んでいいました。

あくる日の晩は、あまり両方とも、前夜のようによく光りませんでした。自然を

家として、川の上や、空を飛んでいるものを、狭いかごの中にいれたせいでもありませんよ。ほたるは、だんだん弱って、日ごとに、小さな川のほたるから、一匹、二匹と死んでゆきました。そして、最後に海ぼたるだけがごの中に残りました。しかし、その光も、だんだん衰えていって、なんとなくひとりいるのがさびしそうです。

ある朝、二人は、この大きなほたるも死んでいるのを見いだしました。そのときすでに、じめじめした梅雨が過ぎて、空は、まぶしく輝いていたのであります。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「赤い鳥」

1923（大正12）年8月

※表題は底本では、「海《うみ》ぼたる」となっています。

※初出時の表題は「海螢」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 海ぼたる

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>